

婦人の子ども

第七卷
第七號

フベール會發行

第八卷第七號目次

- 保育上に於ける自然主義の誤用 榎山榮次
- 獨米に於ける幼稚園 中村五六
- 實用兒童學講義 虛空子
- 自治と愛情 松本孝次郎
- 兒童の個性及其取扱法 光藤泰次郎
- 育兒の經驗 雨峯生
- 都會は子供を育つるに都合よきか 大元茂一郎
- 余がノート 樂天子
- 人生の七時期 朝露生
- 田吾作生活

投稿募集

● 伽話 本誌半ヶ年分以上三ヶ年分
 選擇の上本誌に載録せるものは
 内規により原稿料を呈す

一種類

● 一般記事 選擇の上本誌に載録せるものは
 内規により原稿料を呈す

但し右賞品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取
 らずして其指定する人に本會より直接送ることを得
 一注意 お伽話及一般は記事一行廿二字詰にて半紙又は郵紙に書
 かれたし原稿は凡て返戻致しません此募集は期限を定めません毎
 月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に回はし何時迄も引續いて
 行く積りです。
 宛名は本會へ直接御送り下さい。
 開き封で庶務原稿と標記すれば三十乃至は郵税二錢で参ります。

質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する
 事なら何でもお尋ねなさい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速
 に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年
 分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登録して雜誌を發送致
 します。會員にならずに雜誌文だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會
 か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

- 一册郵税共金拾一錢
- 六册前金郵税共六拾錢
- 拾二册同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増

夏期講習會開催廣告

本會ハ左記ノ各項ニヨリ夏期講習會ヲ開設ス世ノ幼兒教育ニ熱心ナル方々奮ツ
テ御入會アラシムコトヲ希望ス

一 學科及講師 (順序不同)

● 保育思想の過去及將來

東京女子高等
師範學校教授

中村五六

● 兒童の感情及意志

東京女子高等
師範學校教授

黒田定治

● 科學的教育學としての幼兒教育

東京女子高等
師範學校助教授

和田實

● 運動及唱歌遊戲の實際に就て

東京女子高等師範
學校保姆兼教諭

雨森鉏

● 談話の實際に就て

東京女子高等
師範學校保姆

川口得

● 保育上に於ける自然物の應用に就て

東京女子高等
師範學校保姆

池田トヨ

● 音 樂

東京女子高等
師範學校囑托

中村コウ

一時 間

明治四十一年七月廿一日ヨリ八月三日迄
(休ミナシ)十四日間毎日午前七時三十分ヨリ全十一時三十分マ
デ四時間)

一 講習料 金貳圓也

但シ會員ハ二割引

一 會 場

東京女子高等師範學校附屬幼稚園

一 申 込

講習料ヲ添ヘテ直接本會ヘ申込マル可シ

一 證 明 書

志望ノ向ニハ出席ノ度数ヲ案ジテ授與ス

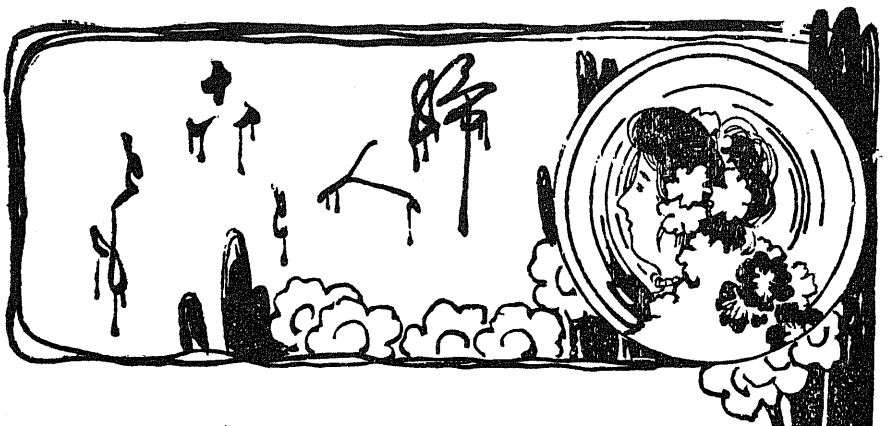
一 寄 宿 所

本講習ノ爲メ地方ヨリ特ニ上京セラル、方ニテ宿泊所ニ御困
リノ方ニハ本會ハ可成的便宜ヲ計リテ責任アル宿舍ヲ紹介致
ス可ク候尤モ此場合ニハ成ル可ク前以テ御照會アリタシ

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

明治四十一年七月

フ レ ー ベ ル 會



第八卷第七號

吾子

保育上に於ける自然主義の誤用

自然主義と云ふと又八益しい文藝論かと云はれるかも知れないが此處に云ふ自然主義は保育上即ち幼児教育上の問題である。

放膽な幼児教育者は保育上に於ける自然主義を極端に迄發展して幼児は自然に任かす可きもの、些の規制も加ふ可からざるものとして氣隨氣儘に行はしむるものがある。其結果は單に幼児は度す可からざる我儘者となり終つてしまふ。是は飛んでもない誤りである。自然主義者は方今保育上に於ける根本原則ではあるが其は被教育者の性狀に適應して教育すと云ふ點に於ての語で決して自然に任かせ自然の趨く所にのみ放還す可きものと云ふのではないのである。斯る誤解は動もすれば筋道のわかつた地位ある人の家庭に時折見出されるもので貧乏人の家庭には比較的少ない様である。元來躰を八益しく云つて子供をいぢめるのが我國一般の舊習であつたのに是は又反對に放縱に過ぎて居る。吾人は子供を作法詰や規則詰にすることを以て幼児教育上有害であると信ずるとはいへ然りとて之を極端に放任することが決して利益であると信ずることは出来ぬ。子供は壓制す可きものではない。併しなから同時に絶体の自由を許す可きものでもない。人生は目的を有し教育には具案がある教育者の求る所を實現せんには多少は幼児自然の行動を制するの必要があるのは當然のことである。併しなから從來の教育は徒らに壓制に過ぎて居る。吾人の叫ぶ所は此の不要なる壓制を除いて適切な自然主義の教育を施さんとするにある。是をこれ察せずして徒に我意に奪れる幼児を放置することは戒めねばならぬ。(湘雨)

獨米に於ける幼稚園

女高師 榎山 榮次 教授

私は獨乙と米國に於て主として小學校の事を調べて参りましたが元來小學校の教育は幼稚園と密接の關係が御座いますので傍ら幼稚園をも覗いて見ました。併し専門とする所でもなく又經驗もなく單に窓から覗いたと云ふに過ぎませんから専門の方々に向つて御話する資格はありませんが兎に角見る丈は見つて参りましたから其見た所丈でもお紹介することに致しませう。

御承知の通り獨乙は幼稚園の開祖フレールの郷里で御座いますから幼稚園は無能く發達普及して居るだらうと思つて居りましたが實際に行つて見ますと是は父案外で一向微々として振はないのであります。是が幼稚園の元祖の生れた國とは思へぬ位であります。私の知つて居る所では獨乙國中ハハリヤ即ちバイエルンを除いては他には全く公立の幼稚園を見ない位です。バイエルンのは市町村立幼稚園の一部に附屬としてあるか若しくは

私立の會合の附屬事業となつて居るのであります私の参りました伯林は首府でありますが唯僅かに十五個の幼稚園の私立幼稚園があるばかりであります。其中有名なのは伯林フレール會の幼稚園と今一つはフレール、ペスタロッツハウスト云ふ會の幼稚園とであります。此二種類のものは彼地に於ても整頓したるものであります。

私の見ましたフレール、ペスタロッツ會の幼稚園は四ヶ所にあつて一ヶ所は大概其人數が百二十人位であります。そして其處には保母養成所、子守養成所、家事練習所(重に割烹を教ふ)幼兒預り所、等が附設してあり其他小學生に手工を教へるなど云ふこともあつて種々のものが一つ所に集められてありました。そして此一派の幼稚園の特色と云ふものは家庭主義でありまして幼稚園の様子は全く母親が家庭を居る様な風があります。従つて保母なども國様に先生と呼ばないでクリツペンタル即ち叔母さんと呼ばせて居ります。幼稚園の仕事は朝子供が來ると同遊嬉室に會して朝の祈禱をします。それがすむと各組

は分れて各の室に入りまゝです。此一組と云ふのは幼
 兒八名乃至三十二人位であります。此幼稚園が他
 の幼稚園と異なる所は一組の幼児が同年者でなく三
 才乃至五才のもの混じて一組として居ます。又
 り家庭の兄弟や妹姉に擬する爲めでありまゝ。又
 室も少なくて凡ての具合が家庭的で壁には額を掲
 げ窓には植木鉢を置き小鳥も飼養して普通の幼稚
 園の様に机腰掛などは置かず唯一つの卓子が置か
 れてあるばかりでありまゝ。室内では如何なる事
 をするかと云ふと子供に室内の掃除をさせ靴を磨
 かせなどして居ました。別の室に入つて見ると子
 供が鋏を持って製本の真似をして居ました。尤も鋏
 は能く切れるのは危険であると云ふので成る可く
 切れの鈍いものを持たせて居ました。尚祝祭日な
 どには子供自身に玩具を作らせて種々な遊び事な
 どをするそうですが是は私は見ませんでしたから
 お話が出来ません。

それから庭には畑らしいものを作り花壇の様
 なものもあつて保姆と共に野菜草花を栽培したり中
 には牛などを飼養して居るのもありました。以上

は各組々で致しますが尙幾組も合併して遊嬉す
 ことがあります。即ち行進遊戯の様なものも是で
 あります。仕事々々の間には自由遊戯をさせて砂
 山を築かせなどして居ます。そして疲れた時は遊
 戯室で休ませます。普通は寢臺ですが幼稚園は日
 本と同じ様に床に直に寢床を敷いて枕なしに頭
 方心持ち高くして臥させます。元來獨乙では枕を
 高くする習慣がありまして金満家などになりま
 すと枕を三つも重ねると云ふ程でありまゝが衛生上
 能くないことであるし英國あたりでは餘り高くし
 ないと云ふので此處で斯様にして居ると保姆が申
 して居りました。斯様にして幼稚園は主として家
 庭的精神を養ふ方針を取り家庭教育を補足すると
 云ふ方針を採つて居ります。

又保姆養成所に入學する人は保姆たる志願の人
 ばかりでなく立派な家庭の人もありまゝすが、是は
 誠によい事だと思ひました。育児と云ふことは女
 子の任務として欠く可からざるもので何人と雖も
 母として立たんには是非學ばねばならぬことであ
 る。是等のことは中村教授の書物にも見えて居る

ことであつた。

以上私の見ました所に因つて之を批評して見ますならば第一に幼児八名に一人の保姆をつけるのは不經濟ではあるまいか、到底行はれぬことではあるまいか米國でも此説をなすものがあります。そして幼稚園が餘り贅澤にやるものだから廣ららないのだと云ふ評があります。次に家庭を模範として仕事をするのは宜しいけれども家庭的にすることは少し不自然ではあるまいか即ち兄弟でないものを兄弟と思はせたり母親でないものを母親と思はせたりするのは不自然なことではあるまいかバーデン大學の教授サルユルは幼稚園に關して云つて居るには

幼稚園の職分と家庭の職分と等しとするのは全然誤りである。又家庭の補足をなすと云ふのも至當ではない。且又幼稚園に於て知力の發達のみを以て方針とするのも誤りである。幼稚園の主とする所は意志の發達の爲めになさるべきものである。云ひ換ゆれば社会的感情の發達を計るのが幼稚園の本旨である。元來人の初の意志と云ふもの

は反射的である。此反射的な意志は追々に發達して複雑なるものとなれば或は中に滯りて容易に反射せざるものとなるものである。此意志の發達を適當にするのが幼稚園の目的である。然るに子供を母親の傍にのみ置いては意志は充分な發達をしない故に幼稚園は同年輩位の子供を一つ所に集めて意志の發達を助くる必要がある。と云つて居る此説に因つて考ふれば家庭と同一視す可きものではないのであります。

又ペスタロッチ、フレーベル會の幼稚園では幼児をして唯遊ばすことばかりでなく義務的の仕事即ち少し位はいやがる事をも爲せる様にして居るが之は少し參考とす可き所ではあるまいか。

それから伯林郊外のシャルロットンブルグには目下特種の幼稚園即ち低能兒丈を集めた幼稚園を作る可く計畫をして居ると云ふことでしたが是は見る機会がありませんでした。同所は學齡に達しても身心の發達不十分にして就學することの出來ぬもの丈を收容して特種の教育を施さうと云ふのですから成功の上は定めし參考となるだらうと思

ひます。

次には米國の様子をふ話致しませう。米國は獨乙に比較すると非常に幼稚園の盛んな所で紐育市内だけでも公立が二九三、も有る位ですから定めし私立のも多いことであらうと存じました。米國の幼稚園は満四才より六才迄即二個年間の教育であります。それで米國の小學校令には幼稚園に關する規定があつて其中に幼稚園の教科として左の五項目が掲げられてあります。

一、自然研究、幼兒に動物、植物、其他の自然現象を直接に知らしむる爲めのもの

で公園などに連れて行きます。(此中に昔話と對話とが有ります)

二、國語

三、唱歌

四、遊嬉

五、手工

右の五で向幼稚園の上組即ち年長な一組には學校と幼稚園との連絡を計る爲めに、話することなく他の助力を借ることなく、各自獨立して課業を黙行すると云ふ習慣をつけよと云ふことが教則中

に定められてあります。私の見ました幼稚園の保姆の云ふには紐育市内に六百人の保姆があるそうです。そして幼稚園と家庭との連絡を計るために時々保姆は家庭を訪問して幼兒の家庭の様子、子供の家庭にありての様子を観察し同時に子供の扱方を母親に吹き込む様にして居ると云ふことでした。そして又某幼稚園では斯る訪問の代りに父兄會を開いて居るそうですが自分は直接訪問する方が利益があると思ふと申して居りました。斯る盛大な勢の中に幼稚園に對して随分はげしい酷評をする人があります。即ちケンブリッジ大學の教授ミン、スツルベルグ(此の人は獨乙人にして米國教育社會に勢力あるもの)は現在の幼稚園を評して

幼稚園は今少し鍛練主義でなければならぬ。現在の幼稚園教育は子供を甘かすこと非常である。幼稚園は今少し威力のある所でないならばならぬ。現在の幼稚園は人に服従して行く點がないから一種の遊嬉場の様に考へて小學校に來てもおとなしく課業に就く迄には多くの苦痛を感ずるのであ

る。故に幼稚園は今少し義務に服従する様な鍛練主義を採らなければならぬ。と云つて居る。又他方には次の様な批難がある。

幼稚園から来たものは却つて然らざるもの即ち家庭より直接来たものよりは發達が劣つて居る此批評に對して某大學では是は定めし幼稚園の教育を打ち消す様なことをして居るためではあるまいかと云ふので過般或實驗をして見た所が果して幼稚園出身の方が優つて居つたと云ふことでありました。私は其實驗を見ませんでしたから何んな實驗であつたか此處に申述べられません。要するに大体米國及獨國に於ては幼稚園は餘りに子供を遊ばせ過ぎると云ふ評があります。私をして云はしむれば幼稚園は單に樂しき場所たらしむるばかりでなく同時に又有益な場所としなければならぬ。子供を唯愉快にするばかりでなく又自制の精神をも養ふ必要があらうと思ふ。又歐米一体に幼稚園と云ふものは一般の教育社會から退けられて第二のものとなつて居ることは能く我國の狀況と似て居るのであります。此點に

六
關しては私は幼稚園教育に従事する人が大に大聲疾呼して幼稚園の必要を叫び幼稚園の聲をして大ならしむる必要があると存します。

幼稚園の欠點

- 一、今の幼稚園は子供の御機嫌ばかり探つて居るから子供が我儘になつていけぬ。
- 二、今の幼稚園は子供を剛好にしやうと云ふことに骨を折つて機會だにあらば何か教へ様として居るから子供は生物知りになつていけぬ。
- 三、今の幼稚園は子供を生物知りにするから従かつて早熟していけぬ。
- 四、今の幼稚園は子供の云ひたい三昧爲したい三昧に振舞はせて居るから學校へ行く様になつても一向注意がまとまらないでいけぬ。
- 五、今の幼稚園では先生が遊び相手をするものだから子供は先生と云ふものは遊びの友達だと思ふて居つていけぬ。

實用兒童學講義

中村 五六

三、身体の生長

一、初生兒の状態 幼兒を育つる上に先づ第一に承知す可きものは其子供の体格が普通一般の幼兒に比較して健康なりや否やと云ふことであるが是には諸學者の調査があつて夫れ々々標準とす可きものがある。其中でも体重は最も重要な目安である。

是に就いて三島醫學博士の調査したる結果は左表の通りである。

女兒 二八七〇グラム(七七二匁)

男兒 三〇四〇グラム(八一〇匁)

其他諸學者の調査したる所も之と大同小異で少くも二八〇〇より輕らざるを以て普通健康兒の標準とす可きもの様である。西洋人の子供は一体に之より多く其平均体重は一般に三二五〇グラムとされて居る。之れに因て見ると我國の初生兒は概して西洋人のよりは五六十匁ばかり輕いものと云

ふことが出来る。
次に同博士の調査したる身長は

女兒 四八、七センチメートル、(二尺六寸三分)

男兒 四九、一センチメートル、(二尺六寸七分)

是も西洋人の幼兒平均身長に比すると約一センチメートル小さいと云うのである。

頭圍は三二乃至三七センチメートルで女兒は男兒より半センチメートル小いのが普通で是が初生兒の体中最も長き直徑を有する部分である。後來大きくなる可き胸圍も初生の時は通常頭圍よりも一

二センチメートル小さがきまりである。併し此割合は生後少きも三ヶ月、多きは四五月份迄維持される丈でそれから後は胸圍は浸々として膨大して滿二十一月にして頭圍胸圍相等しくなり

是より後は胸圍は常に頭圍を遙に凌駕するものである。

以上は我國に於ける初生兒の体格の統計的結果であつて幼兒の体格を判定するに必要なる科學的根據ではあるが尙其他に幼兒の健康を判定す可き参考材料が數多ある様に思ふ。初生兒の泣き聲など



も其一つである。若し其子が充分に能く發育した子供であるならば其産聲と云ふものは可なり大きな聲即ち音量が可なり多くなければならぬ筈であるが若し體質虚弱なものであると然様な大聲は出し得ないものである。又皮膚は必ず赤色を呈して居なければならぬ。是が赤ん坊と云ふ名稱の生じた所以である。概して老人などの云ふには赤色の強い程其子供は色の白い子であると云ふて居る夫れ、兎に角生れた瞬間に赤色反應の強い程健康な子供であると云ふとは確かなことである。其他頭髮は房々と密生して居るのや身体の各部手足などか全体肉づいて圓み勝になつて居るのは何れも發育の充分な證據であると思つて差支ないものである。勿論子供々に因つて寸尺や目方其他の状況に多少の異状のあるのは當然の事ではあるが以上述べた處を標準として之を距ること遠からざるものならば先づ健康なものであると思つて然る可いである若し又此等の標準に適應せず餘程健康の度や發達の具合が劣つて居るものと云ふことならば其子供の養育には一層周到な注意を要するものである。

ある。然らばとて決して心配するに及ばぬ逆も生長の望みがないとして落膽するにも當らぬ。斯る虚弱なものでも天命ある以上は細心之を愛育するならば必ず豫期以上の好果を得るゝと云ふ限らぬ。現に記者の知人の子息中にも或は並外れて虚弱であつたり、或は月足らずに早産したものでも看護者の周到なる愛育の結果今は何れも健全な生活をして居るものが幾人もある。故に初生兒の健康状態は養育上調査する必要はあるが決して普通の体格がないからとて失望することは無用である。

二、体重の増加 幼兒の体重は生後直に増加するものではなくて通常は生後一日々々と却つて減量して行くもので如何にも心細い次第であるが其兒が健康な子供ならば第五日目に至ると漸時其減量と恢復して滿一週日即ち七夜の祝盃を擧ぐる時は再び生初の体量を有し居るものである。併し體質が虚弱であるとか又は體質は申分なくとも營養が母乳でなく牛乳、煉乳、又は其他の人工營養であると此恢復は中々一週日の中には出来ないもので

ある。母乳が幼児の發育に如何程必要であるかと云ふことは是でも判ることである。

是より以後幼児の体重は日々二〇、乃至三〇瓦宛増加して行つて満四ヶ月の頃には殆んど生初の時の二倍位になるものである。晩くも半年に達する頃には必ず倍加するものである。而して是より以後は日々増加量は前程に急ではなくて平均一〇乃至一五グラム宛の増加で滿一年に達する頃には生初の時の三倍となるものである。之が最初の祝誕生日に於ける健康兒の資格である。

尙是より後の發育は次表の通りである(三島博士)

年齢	男兒	女兒
1.	9.0	8.5
2.	10.6	9.9
3.	12.4	11.5
4.	13.7	12.9
5.	15.2	14.5
6.	16.5	16.5
7.	17.8	17.2
8.	19.1	18.7
9.	21.0	20.5
10.	23.0	22.3
11.	25.0	24.4
12.	27.0	27.8
13.	29.8	31.4
14.	33.6	36.5
15.	38.7	38.2

以上の表に因つて見ると子供が滿六年となつて小学校に入學する時には生初の時の体重に比して少くも五倍の重さを持つて居なければならず尋常小学校を了つて中學校に移つたときには九倍の体量を有するを以て普通のものとするのである。

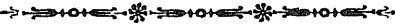
身長増加 身長増加は体量の様に迅速でない
 幼兒最初の一年間には多くは

男 二四、四センチメートル
 女 二四、二センチメートル

の發育をする、是を西洋に於ける幼兒初年の發育量一九、八(男兒)に比すると著るしき違である。是は如何なる理由に基くかと云ふに三島博士は我國氣候の溫和なると哺乳の偏に母乳に因る結果であると云はれて居る。果して然りとせば我國は實に小兒の樂園であると云はねばならぬ。左に同博士の調査に係る發育表を示さう。

此表の示す所に因ると子供の小学校に入るときは正に生初の時の二倍に伸長し更に高等小学校を了つた時に其三倍に達するものであることが知れる。頭圍及胸圍の膨大 初生兒の頭圍は三三乃至三五センチメートル即ち曲尺で一尺一寸乃至一尺二

年齢	男	女
1	73.5	72.9
2	79.5	98.9
3	85.4	84.9
4	91.7	91.0
5	97.4	96.5
6	102.8	102.4
7	108.3	107.2
8	113.8	112.0
9	118.3	116.2
10	122.8	120.4
11	127.0	125.9
12	130.8	132.3
13	135.2	139.0
14	141.5	143.2
15	146.3	144.7



寸位であるが七ヶ月の後、初生児の足投げ座りをする頃には四四センチメートル即ち約一尺五寸許りとなり二十一ヶ月の後、二九誕生前頃には四七センチメートルとなつて胸圍と相等しき大ききさとなるものである。

初生児の胸圍 平均三一センチメートル 即約一尺位で七ヶ月後には四三センチメートル二十一ヶ月後には頭圍と同大となり是より以後胸圍は益々膨大して遂には遙に頭圍を凌ぐ様になるものである。

胸圍と身長とを比較することは、幼児の健康を判定する上に最も必要のことである。今三島博士の調査に因つて計算して見ると、身長と胸圍との比は三と二即ち胸圍は身長長の三分の二であつて、半身長より長ずること實に八センチである。併し虚弱な子供は斯る發育をして居らず、時には半身長位しかないものもある。兩手を水平に左右に上げた時の中指と手と足 兩手を水平に左右に上げた時の中指と中指との距離を指極と云ふのであるが、此指極は西洋人は身長と同長か又は夫れ以上にあるのが普通である。

胸圍と身長とを比較することは、幼児の健康を判定する上に最も必要のことである。今三島博士の調査に因つて計算して見ると、身長と胸圍との比は三と二即ち胸圍は身長長の三分の二であつて、半身長より長ずること實に八センチである。併し虚弱な子供は斯る發育をして居らず、時には半身長位しかないものもある。兩手を水平に左右に上げた時の中指と手と足 兩手を水平に左右に上げた時の中指と中指との距離を指極と云ふのであるが、此指極は西洋人は身長と同長か又は夫れ以上にあるのが普通である。

短いのが通例だ。然るに本邦人の指極は、何れも身長より多少

年	男	女
生初	46.6	46.3
1	71.1	70.0
2	77.3	76.4
3	83.6	82.7
4	89.5	88.2
5	94.3	93.4
6	98.9	98.6
7	105.0	103.3
8	109.0	107.4
9	114.2	112.5
10	119.2	118.1
11	123.7	123.2
12	127.9	128.3
13	133.3	134.5
14	138.6	140.2
15	144.7	141.7

足の長は元來、身長の上にあるのか普通である。尤初生時は、歐洲人も、下体は身長に達しない。凡そ六才になると、下半身は、身長に均し、以後は、下肢の生長速かにして、遂には、全身長に對して、常に五十一乃至五十五パーセントの比例を保つて居る。詳しくは、次表に因つて判るであらう。

年	男	女
生初	14.0	13.8
1	32.5	31.6
2	35.9	35.1
3	39.2	38.5
4	43.0	42.2
5	46.5	45.8
6	50.4	50.2
7	53.4	52.5
8	56.3	54.9
9	58.6	57.9
10	60.8	60.0
11	62.9	62.3
12	64.9	65.6
13	67.1	68.6
14	70.3	70.9
15	72.7	71.7

古來「赤子は寢て居る中に育つ」と云ふ説がありま
すが今子供を調べて見ると殊に世俚諺の意味深い
ことを知ることが出来ます。其譯は嘗て獨逸のロ
ベルトと云ふ學者の調べたと云ふのに臥して居る
人の身長は通常起つて居る人のに比して平均一、
三厘多く二十四時間起ち詰めた人の身長は常
のものに比して六厘位迄短いものたそうである
起きて居る中は段々短くなるものであるとしたら
ば身長は伸びるのは寢て居る時の外ない譯である
から前の俚諺は誠に意味のあることを云つたもの
と云はねばならぬ。

自治と愛情

虚 空 子

世の教育者たるものは、殊に愛といふ事を忘れて
はならぬと思ふ、しかし其の愛が多くは姑息の愛
に流れ易いのである、そこで眞の愛といふのは、
今少し子供に自治の習慣をつけて貰ひたい、袴の
紐が解けたといつては結んでやり、鼻が出たとい
つてはかんでやつたりしたのでは眞の愛とは言へ

ぬ、併し之が今日一般に親切な先生といつて歡迎
されて居るのである、勿論こんなことは面倒だと
いつて一向かまいつけぬ先生に較べては多少優れ
て居るには相違ないが、そんな事は以前にも出来
るだらうといつて、子供相應自身にやらせる様に
して、愈々出来ぬといふ時に手傳つてもやらせる
といふ先生から見ると劣つて居るだらうと信じる
何れにしても今少し子供に自治の習慣をつける様
にしたいたものだ、所謂子供をあまへさして仕舞て
は大變である、そこで子供に先生は私共を大事に
して可愛がつて下さるが、又我儘をいつても到底
自由にはならぬものと思はせねばならぬ、さりと
て又先生は無闇に怖いものと思はせてはならぬ、
今日一般の家庭等に於ては殊に後者の弊に陥つて
居るものが多い、そんな事をすると先生にいひつ
けると「いひ子供の方は天を非常に恐れて居る風
がある、大に憂ふべき事である、故に幼児の教育
に従事せらるゝ方は、威あつて猛からずとか寛嚴
宜しきに叶ふとか云ふ語を訓練上の大主義として
貰ひたいのである

兒童の個性及其取扱法

文學士 松本孝次郎

それから其小供に遊戯をさせます。際に此發動的的小供は概して言ひますと遊戯などは餘程得意な方で上手であります、殊に一組の小供を扱ふ時に此發動的の性質の充分に有る者を以て此組の嚮導の地位の所に置いて其小供をば中心として遊戯をやるといふと大變工合好く行ける、大層面白く行ける然るにさう云ふ方法を執るといふと益々此發動的兒童は其個性が殖へていけない、それだからして遊戯としては餘り一組の遊戯の全体が面白く出来ない活潑に旨く仕悪いといふやうな不便はありまして之を恐んで唯々上手にやる發動的の小供をば中心としたやうな取扱方をしない様にした方が小供の爲に宜しいのです、詰り發動的の小供は大將が其他の者を之に従はせる様なやり方を以て遊戯の時に能く整頓が出来巧みに出来すけれど其度々それをやると益々其小供の個性を發達させるからそこで此あとの者に興味を失はせない様

にある丈の程度に於て、時々は中心の位地に立つてやるけれど何時までも絶へず之をさせない様にすれば自然と發動的の小供の個性をば無暗と發達させない様になるのです、それであるから私の詰り研究した結果で申しますと幼稚園などで何時でも遊戯の時に中心になる小供を極めることは悪い、自然に極めて仕舞へば其小供は發動的になつて仕舞ふ、それからして何時でも此類の小供に植物などをば見せてさうして幾らか自然に近づけるといふやうな事も必要ですけれど、此動物などには接近させる方法を考へることが餘程必要で成る可くこちらで以て實際の植物採集といふやうな場合には餘計に此小供を連れて行つて宜いけれどもこちらで或花を探つて其花に付て學術的に花はどうか云ふ花でどうなつて居るといふやうなことを説明してやることは概して悪い、詰りこちらで説明をしてやれば其小供は右の耳から左の耳に抜ける小供だから詰りこちらで熱心に説明したことに對して充分に注意して居らないから此小供の智識を養成する様にはならない、だからこちらで問うと

其小供自身に觀察させて答へさすといふ様にし保
 姆の方で之を説明的に述べるとは斯う云ふ様な
 小供を取扱ふ方法では無い、成るべく小供の精神
 を働かせて考へさすといふやうな手段を執つた方
 が此小供を教へる旨い方法です、物理とか化學と
 かさう云ふ學問上の智識は此類の小供には早く授
 けられた方が宜い、何故かと言ひますと此自然界には
 物理上どう云ふ譯であらうかとか化學上どう云ふ
 譯であらうかと言うて説明を求め、考へなければ
 ならぬやうな問題が澤山ある、即ち小供などに
 能くある事ですが、どうして電氣が出て來るだら
 う、どうして此の月は自分が歩いて行くと月も
 一緒に歩くやうになつて居るだらう、さう云ふ問
 はナカ／＼小供には自然に出るものですさう云ふ
 問がある時には發動的の小供に自ら考へさす習
 慣を附けることが餘程必要です、即ち小供が天然
 の事を問ひたがる其問ひたがる性質をば成るべく
 物理化學といふやうな理學的の方面に導いて兎に
 角道理を考へるやうな性質を持たせる方が此小供
 を扱ふのに非常に得策であります、

此發動的の小供は我々の方で餘り命令でやるとい
 ふといけませぬ、斯うしろとかア、してとかいふ
 言葉で以て命令が多いのは餘り役に立たぬので
 す、こちらからして命ずるといふと却つて反對な
 事をやつてさうして保姆や教師の顔を見て居ると
 いふのが矢張り發動的の小供に多いのです、一度
 命令をして小供が聽かないから尙更に命令する又
 聽かない、尙一層強くするから自然と命令を聽か
 ないといふ、割合に重い命令を與へる事になれば
 益々其小供の反抗性が強くなつて來る此發動的の
 兒童にはさう云ふ事をしてはいけなやと言ふと
 其命令が何故害があるかといふと「いけなや」と
 いふ方の止める言葉はチョツとも心に對して強い
 勢力を持たないのでありましてさう云ふ事をする
 といふ運動の觀念の方が強く感ぜられる、元來が
 運動性の小供でありますから運動的の觀念はさう
 云ふやうな小供の精神に大變強い感動を與へる、
 「してはいけなや」と抑へ付ける抑制の方面よ
 りはさう云ふ運動といふ言葉の方が強く心に感ず
 るのでそれで其觀念が働いて其運動をやらせる様

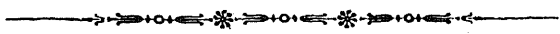
になる、詰り言ひますと此類の小供には何でも運動に關係した觀念は感じが強いですから此類の小供には精神の中に於て勢力を持ち易いだからこちらで言つた事が却つて運動を奨励するやうな意味になるのです、だから言葉で命令をするよりは寧ろこちらの舉動で以てそれはいけないといふ事を見せた方が効力がある言葉で命令を與へるよりはこちらの舉動で見せた方が効力がある、それでありますからこちらが止めるといふと勢に乗じて益々やるといふのが發動的性質のものであります、詰り黙つて之を止めて仕舞ふ、或はこちらの様子で示すのが確かに良さ方法であります、丁度催眠術に掛かつてさうして催眠の情態に在る人がこちらで以て何か言ひますとズツと言つた通りやるといふのは何の爲かといふと稍々こちらで觀念を與へると其觀念が直ぐに其人の精神の中に勢力を持つて來るからしてそれで直ぐに其人の運動になつて表はれる、それと同じ事でこちらで其小供がして居る舉動を止めさせやうと思つて何々をしてはいけないぞといふと何々をしてはといふ行ひに關

した方の觀念が勢力を持つて却つて運動になつて現はれる、それだから此類の小供には其觀念を與へるやうな命令をやることは却つて害がある、それから罰を與へることに付ても其小供に對して罰を與へるのは餘程考物です、詰りこちらが罰しやうと思ふと其小供の方で却つて自分が其罰を悔へるといふ事を以て愉快とする傾きがあります、詰り其罰するぞといふ罰を忍んで受けて自分が悔へて居るといふ所に一種の愉快がある、矢張り自分の力を發表する考を起すのです、自分はえらいであらう自分は是丈けの力を持つて居る是丈け反抗が出来る、えらいであらうといふやうな感じを持つて居る、それだからして此類の小供にはさう云ふ事をすれば罰しますぞといふ事が餘り効力が無い却つて心の方からして悪いといふ事を理解させて止めさせる、訓誨を與へるといふ方法が罰といふ恐怖心に訴へる方法よりも一層効力が多い、要するに此發動的兒童といふ者は學問上の言葉で言ふと暗示性といふものが大變強いのです、チョツと言はれた事からして暗示、暗に示された事か

らそれを實地にやる、さう云ふ性質は非常に強い
 のですから僅かに示されても直さに自分がそれを
 やつて見るといふ性質が強いから餘程之を取扱ふ
 時に何でも少しの悪い方の影響でも與へるといふ
 と直ちに大變悪い事をやつて見るといふ傾きが多
 い、ですから斯う云ふやうな小供を扱ふには周圍
 の境遇に付て餘計氣を附けねばならぬ、境遇の爲
 に感化されることが多い性質を持つて居ると思は
 なければならぬ、

次に受動的兒童といふのはどんなやうな兒童であ
 るかといふ事を申ませう、此受動的兒童と申しま
 すのは前にも申しました様な自分からして活動す
 るといふ方の性質に乏しいから同じ悲しい事があ
 つても思切つて啼いて仕舞ふといふので無して心
 の中に怵へて居つてさうして長くシタ／＼と悲ん
 で居るやうな傾きがある、それから概して言ひま
 すと兎角受動的兒童の方が考が沈んで居るといふ
 やうなさう云ふ傾きがあるです、世間で俗に落附
 いて居る小供だといふのは大抵受動的の兒童です
 誠に幼いが能く落附いて居るといふのはそれは受

動的の兒童であります、此受動的の兒童でありますと
 暗示性といふものが餘程少いからしてそれで周圍
 の境遇がどうであらうとも境遇に依つて著しき所
 の影響は受けなだから世間で言ふ様に彼處の家
 では兄弟があつてさうして片方の小供は氣の落附
 かぬ騒ぐ小供だけ一緒に育つて居りながら片
 方の小供は能く落附いて居るといふ此能く落附い
 て居るといふのは暗示性の少い小供であるから一
 方の兄弟がどんなに騒いでも其影響を受けない様
 になつて居る、それだからして此人々の小供が割
 合に下層社會の悪い家庭に生れた小供であつても
 其性質が良いといふやうな小供が出来る、詰り自
 分の周圍の影響を受けない小供だからあの家に珍
 しく良い子が出来たといふのはそれです、それで
 良い小供が出来たと言はれるのはそれは大抵皆受
 動的の性質のものであります、此受動的の性質の
 小供は極く幼い時には他の人から見ると幾らか鈍
 くはあるまいか、あの小供は遅鈍ではあるまいか
 といふ疑を受ける性質の小供であります、併なが
 ら遅鈍のやうに見へて居りますが年を取ると隨つ



て此遲鈍のやうになつて居る性質は段々變つて來
 まして本當に心が能く落附いて居つて何事でも出
 來るといふ方のさう云ふ勢力が追々に表はれて來
 るのです
 先生に向つて手を舉げたり或は聲を出して質問す
 るといふやうな事は發動的の方の兒童はやりませ
 ぬ事があつても考へて居る方若し側へ保姆が來
 て問へば漸くに答へるといふ譯で自分から公けに
 發表するといふやうなことは好みませぬ、發動的
 兒童の方は盛んに問を發することがありますが若
 し教師が之に向つて答へした時に發動的の兒童は
 自分の問うたことに答へくれるのだから能く注意
 して聞いて居るかといふと決してさうで無い、却
 つて其間に對して注意して聽いて居るのは受動的
 の小供の方が能く聽いて居る、それだからして小
 學校などでも質問を餘計する小供は必ず良い小供
 ぢや無い、黙つて居る小供の方が優等が多いので
 す寧ろ發動的の兒童の方は受動的の兒童の智識を興へ
 る機會を作る爲に發言する様な事になつて仕舞ふ

それでありますから若し此教師の位地に立つて見
 るといふと如何にも問を餘計出し色々尋ねるから
 良い小供であらうと思ふ人もありますけれども決し
 てさう云ふ譯にはいかぬのです、それから受動的
 の兒童の方は幾らか自分の心が臆するやうな傾き
 がある、些と臆病といふ傾きがあります、兎角遠
 慮深い小供でいけません云ふことを訴へらる
 るのは發動的の兒童では無くして受動的の兒童の方
 が遠慮深い性質があります、併し此遠慮深い或は
 何か氣が臆する様だ、遠慮とか臆病とかいふ事は
 何の爲に起つて來るかといふと其小供自身の心に
 於て充分まだそれを知つて居らないかも知れぬか
 ら自分の心に明かに知つて居ると言はれないから
 遠慮して居る、だから此臆病とか遠慮とかいふ方
 は決して悲むべき性質では無くして却つて喜ぶべ
 き方の性質であります、それだからして此類の小
 供は愈々自分で十分知つた、明かに分つたといふ
 ことがあれば其臆病といふ性質はスツカリ變つて
 決斷といふ性質になるのですそれだから此類の小
 供は非常に思切つたことをやることがあります、

それは何の爲かといふと充分知つてさうして心に決断が出来た爲であります、それであるから諸君が直ぐ答が出来ると言つて手を擧げて居らない様な小供の中に愈々名前を指して言はせて見れば意外にもナカ／＼巧みに充分に能く答へる小供のあり事を發見するでありませう、何の爲かといふと受動的の兒童は充分に知つて居らないと思つて居る時には答へられるといふ方に手は擧げなかつたのであらう、それでありませう、或小供は幾らか遠慮勝である臆病であるといふ風に見へることを初から悲むに及ばない其臆病に見へるのが矢張り其小供の用心深い又充分明かに知らない事は自公が氣にして居る爲であるのです

▲灌漑に三十億圓を費す 米國コロラド州のウムコムバダレ地方は其面積百二十万エーカー(凡そ四十万町歩)の大砂漠なれども其中凡そ二十八万エーカーは灌漑の便を與ふるに於ては充分豐饒なる土地となり三百万人以上の人民を養ふに足るべしとの事にて米國政府は遂に十五億圓を支出して大灌漑工事を起すに決したるが目下工事は着々進行し居る由にて竣工の上は地價二十五億圓以上に上るべしと

○十七字詩

鹽野奇零

甲板に萬里の風や夕納涼
 縁日の肩押合ふて團扇かな
 庭にひく笥の下や心太
 夕立やわたら娘の下駄さげて
 立兼し雨戸の外や焚く蚊やり
 馬洗ふ流れの上やとぶ螢
 聞きわけて母の預かる實梅かな
 夕立や濡れぬ仕度も濡れてから
 帷子や草木に吹かぬ風もわる

育兒の經驗

(承前)

光藤泰次郎

人に接する事、子供は元來、餘程我が儘なる、餘程勝手なる傾向を持つて居る。他の言葉を以て之を言ひあらはしたならば、餘程利己的の傾向を持つて居るといつて宜しい。若しも人類が原人の野蠻であつた時代から、今日の文明に赴いたまでの變化を、人一代の間にするといふ説が眞であつたならば、子供はさしづめ、野蠻時代の、利己的で、争闘好であつたのに相當するのでありましよう。それ故に接する所の人の如何によつては、この利己的の傾向は益々助長しようし、争闘好の傾向は益々盛になるであらう。或は其の反對に此の傾向は漸次其の影をひそめて、從順とか、協同とか、親和とか、種々の善良なる諸徳の萌芽が益々増大するに至るであらう。それ故に子供の接する所の人に就ては、子供を養育する所の責任を負うて居る両親は常に注意を怠つてはならぬと思ひます。

1 両親に接すること。子供が両親から感化を受けるとの多きものは、今更いふまでもない。親が持つて居る愛情親が抱いて居る思想、親の持つて居る趣味、親がする所の行爲舉動、等は子供に接する機會が多いだけ、それだけ子供に感化を與へる。それであるから私は出来るだけ、機會を見つけて、子供に接する時機を多くしやうと勉めて居る。子供の教育の一方面から見ますと、父乃至母が業務多端のために、子供に接する機會が少くあるは、甚だ子供の不幸であると言ひ、断言して差支なからうと思ひます。殊に男の子になりますと、どうしても父親が男性的で剛強なる方面の感化を與へる必要があるかと考へます。其の證據には、特別の例はありませんが、男親のかけた所の男の子は、どうも温和で、靜で、餘程女性的に傾いて居るかと思はれます。そしてやゝともすると氣がよはく涙もろく、それで我が儘な點があるやうです。これは或は慈愛が餘りあつて、謂はゆる重石がさかぬといふ弊があるのではないかと考へられます。されば子供の教育の方から觀察いたしますと、両親が具足して、兩々相携へて感化を與へて行くといふ

とが、最も幸福であるとは今更申すまでもないを
と考へます。自身冷水摩擦をして、其の例を示し、
又子供に冷水摩擦をさせるのも皆自分でやるやう
につとめ、夕食後の運動や遊戯や、自身仲間にな
つてやるといふのは、皆此の男性的感化を與へ
んが爲でありませう。

2 兄弟相互の感化、子供が父親に接し、母親に接
し、祖父に接し、祖母に接するといふと、接する
所の人が、皆自分より年も多く、力もつよく、智
慧も多く、何もかもすべてすぐれて居る所から、
依頼の心がつよく、あまへる心があつて、なかく
我が儘なものであります。然るに弟なり妹なりが
出来て、自分が年上になり、兄となり姉となると
いふと、今更でとは餘程ちがつた心意氣になつて、
幼い者弱い者をいたはるといふ優しい殊勝な心組
になります。是は子供に取つて餘程重大なる境遇
の變化というて、差支なからうと思ひます。此の
境遇の變化こそは、子供の教養上、種々利用すべ
き點であらうと思ひます。先づ第一に兄弟は弟妹
を愛し、弟妹は兄弟を敬ふ事を知らせる事が出来

る。學校に於て如何に巧妙に授業をして、兄弟
のない子供に兄弟仲善くするを本當に知らせる
とは出来まい。兄や姉や弟や妹を可愛がるべきも
のだといつても、弟妹を持たぬ子供には、兄弟間
の愛情が了解されやう筈がない。それ故に兄弟の
ない一人ばつちの子供は、此の點に於ては不幸で
あるといはねばならぬ。

然るに弟を妹を持つ所の子供は、自然的に
幼い弟を愛し、稚い妹を愛する情が湧き出るも
ので、若しも両親が少し氣をつけてさへ居れば、
兄弟互に相愛し、互に仲よくするとは、益々養
成し得るものである。試みに小供に向つてあなた
の兄さんを貰ひませうとか、あなたの妹を貰ひ
ませうとか、戯れて御覽なさい。彼等はいまだ
戯といふを知らないものだから、其の言葉を
眞實と思ひ、眞剣になつて、厭ひ、悲しみ、はて
は泣くに至るでありませう。嘗て或家に於て、
乳の都合より、幼弟を他家に預けたるに、其の兄
姉などは、あまりに可愛相だとして、毎日泣いて兩
親にせがみ、遂に先方に行つて取りかへして來た

といふ話を聞きまししたが、兄弟の至情皆かうであらうと思はれます。宅にふきましては、兄を敬はせるは無論、兄弟などすべて年上のもは、年下のものを用いたはるといふ風にしむけて居ります。しかし是は好き方面の觀察であるが、兄弟同志でも必ずしも好き方面ばかりではありませぬ。若し年齢なり體力なり智力なり、其の差が大なれば大なる程幼者をいたはり幼者を愛し、其の差の少なるに従ひて互に競走する傾があるやうに思はれます。第二弟妹として兄弟を模範とし之に模倣せしめ、兄弟には責任を持たしむるを。子供は模倣性が強くあるとは、今更申すまでもありませんが、しかし大人のとをまねるよりは、成るべく年の同じ頃なのをまねる方が面白くもあり且は自然であるらしく思はれます。言葉にしましては自然に姉なりに居りますれば、自然に覺えます。唱歌などにしましては、兄や姉が歌つて居れば、弟妹はいつの間にか覺えてしまひます。これは自然に兄弟が弟妹に及ぼす感化の方面でありますが、朝起き出した時の挨拶にしても、夜やすむ時の挨拶に

しても、御飯をたべる時の行儀にしても、他所に行く時歸る時の挨拶作法にしても、弟妹に對しては、兄の如くせよ、姉の如くせよといひ、兄や姉に對しては、妹や弟が皆姉さんや兄さんの眞似をするから、兄さんや姉さんは御手本にならねばならぬといふやうに教へて行きます。さうすると兄や姉は幾分責任を感ずるかして、益よくなつて行きますし、弟妹は見やう見まねに、力を勞せずして習得するといふ益があります。第三朋友との交際、両親に對する關係は全然尊長に對する關係であるし、兄弟に對しては幾分之に類似して居る、弟妹に對しては、幾分長者となつたやうなものであるが、何れにしても子供の我が儘勝手は未だ十分に脱却するに至らぬ。婢僕に對しては、日本に於ては大抵主従關係であるから、なほ一層我が儘を逞うするといふ傾向があるやうだ。か友達となると、其の關係が一切平等で一切對等である。否平等といふとは出來ぬ。體力が平等でない、智力も平等でない、腕力も平等でない、辯力も平等でない。しかし其の關係が對等である。それ故に見

童をして社會生活に馴れしむる第一歩として
 友達とは是非遊ばせたいと思ふ。そして此の子供の
 我が儘な點を矯正し、共に楽しみ共に作業するに
 馴れしめたい。しかしどうも近所の子供とはあ
 まり遊ばせたくないやうな氣持がする。それは遊
 びに出すと野卑な言葉を感じて来る。野卑な事
 するを覚えて来る。無論よい事も覚え来るが、
 其の利害如何は餘程考へものであるからだ。それ
 に子供の社會は、自由競争の社會だ。腕力の強い
 者が勢力を振る社會だ。勢力ある者は随分無理を
 押し通す社會だ。随分弱い者がいぢめをやる社會だ。
 だがなほ一步を進めて考へて見ると、室の植木は
 花は早く咲くか知れないが、しかしとても棟梁の
 材となるとは出来ない。家庭で十分注意をして、
 教育の基本を強固にしておいたら、害を受けると
 は少く、益を受けるとでわらうと、幾分の制限を
 つけて遊びに出すに居ります。實は世間の
 家庭で、子供の教育に注意して居らるゝ所の子弟
 が、交際其の他あまりに制限せらるゝ所から、温
 和ではある、從順ではある、人ずればして居らぬ。

しかし積極的の善事をなさうといふ氣力に乏しい
 又朋友等が何か善からぬ事を企てた場合に、敢然
 として惡に抵抗する意思力に乏しい、心ならずも
 同意するといふ腑甲斐なき有様のものを、折に
 目撃します所から、幾分意志力修練等の足しに
 もならうかと、前申す通り或る制限を附して遊び
 に出します。されどか友達との交際の利益のみを受
 けて、其の害を受けないのは、私は幼稚園である
 と思ひます。近所のお友達との交際は、近所に住
 るまふ人によつて、善悪様々であつて、共に一様に
 はいひ得ませんが、また一様には取り扱はれませ
 んが、幼稚園のお友達は、保姆諸先生の監督の下
 に、遊戯交際しまするとして、氣を許して居るこ
 とが出来ず、私は此の社會生活に入る第一歩と
 して、同年輩のお友達が、保姆諸先生監督の下に、
 對等に交際する、此の幼稚園教育を必要と信じま
 す、幼稚園教育の必要は無論他の點からも立論せ
 らるゝに違ひないのであるが、私は特に此の點か
 らもいふことが出来るといふをこゝに明言してお
 きます。幼稚園に入りましてから、今までと子供

の様子がちがつて来た點は、我がまゝが少くなつて来た事でありませう。これまでは幼弟幼妹と遊び戯れるにしましても、やゝもすれば我が儘勝手をする癖がありますし、或は偏狹に自分の者を他に貸し與へ、或は分ち與へるに吝であつたものが、だんだん、我が儘勝手がへつて來ましたし、自分の持ち物であつた玩具を貸し與へたり、菓子其の他のものを幼弟妹に分ち與へる等應揚になつて來ました。子供の性質にもより、家庭の仕つけの如何によつて、利益をうける方面も一様ではなからうが、私の子供は此の點に於て大に利益を受けました。次には或るか友達の特別の感化を受けました。それは幼稚園のか友達に哲ちゃんといふ子が居ります。此の子は天才であるか修練の結果であるか、兎に角非常に繪がうまい。殊に動物の繪が上手だ。毎日哲ちゃんのかいた動物の繪を貰つて來ては、紙を下さいといふ。紙を與へると鉛筆を以て毎日まねてはかき、寫してはかきして居たが、終には之に満足しないで、動物の繪の本を買つて下さいといふ。買つて與へると、それを下にかい

て寫してかくやら、眞似てかくやら、終には馬なり象なり麒麟なりお手本を見ないで、どうやらかうやら格好がとれて、それとわかる様に進歩して參りました。是等は一般に受けた感化と、特別に受けた感化と、各其の一例に過ぎないが、此の外色々の感化をうけたとは明瞭であります。なほ對人關係に統ては婢僕との關係、祖父母との關係、出入する人との關係等様々ありますけれども、あまりくだくだしくなりますからやめておきます。

しかし此の對人關係は至極大切な事であつて、之によりて其の人の人格は定まる、其の人の人生觀は定まるかとも思ひますから、これから先も十分注意に注意を加へて行く考であります(まだある)

都會は子供を育つるに都合よきか

雨 峯 生

1都會は子供を育つるに都合よきか、それとも都合わるきかは、都會に住んでゐる人に取つて、非

常に重大なる問題であつて、決して雲烟過眼視すべき問題でないと思ひます。又是非とも解決をつくべき問題であつて、都會がよければ、よいが上にもよいやうにせんとをつとめ、都會がわるければ、其のわるい點を成るべく矯正せんとをつとめなければならぬと思ひます。それ故に私は自分の考察したを申し上げて、皆様方の御參考に供したいと思ひます。

居は氣をうつす。孟子といふ支那の賢人のお母さんは、孟子を育つるために、三度其の家を遷したと申します。これ孟母は、周囲の事情の子供に及ぼす影響が善惡ともに大なるを認識したからでありませう。孟母ならぬ人も、苟も我が子の教育に力を盡して居る人は、三遷は愚な事、五遷も六遷も敢へて辭する所では無からうかと思ひます。それは何故であらうか、昔の語にもある通り、居は氣をうつすからでありませう。も一歩進んでいへば、境遇の感化勢力はなかなか大であつて、寧ろ境遇人を作るといふ方が適當であるからでありませう。さらば東京のやうな大都會が子供に及ぼす影

響は、善か悪か。

3 都會は子供の健康に宜しくない。春の川山なき國をながれけりて、阪東太郎、名を取つた利根川のやうな川が、見渡す限り平蕪の地、目を遮る山もなければ、まして月日も行き憚るといふ高山もない、其の平原の中をうねりうねつて流れて居る。吹ひて来る空氣は、清潔で、上下なる白帆は穩である。かやうな平原に居れば矢張り其の平原的の感化を受けずには居られぬ。又奈良七重七堂伽藍の重櫻で、古の奈良の都のあつた處、山はと見れば嵯別高い山はないけれども、芳草生ひ茂れる若草山や、老杉古松森々と生ひ茂つてゐる春日山を始めとして、種々歴史に關係のある山々に取りかこまれて居る古京の地、春日神社はものさびて、神鹿は人に馴れ、東大寺の大佛、興福寺の伽藍、法隆寺の夢殿や、唐招提寺の五重の塔、猿澤の龍には金魚鯉ひれて龜が遊んで居る。見るもの聞くもの一として、前世紀のものでないものはない。かやうな土地に生長するものは、どうしても亦かういふのんきな周囲の影響を受けずには居られ

ぬ。それから又目に青葉山はとどきす初鯉で、目に見ゆるものは新緑滴るばかりの青葉か、さらすば、春の海ひねもすのたりのたりかなの大海で耳にきくものは、梢にさへつる頬白か、空に歌ふ告天子か、雲井に名のるほととぎすか、口に入るものは、鎌倉をいきて出でけり初鯉で、かやうな處に住まへば、またかういふやうな影響をうける。然るに東京のやうな都會はどうであらうか。吹いて來る風は何をもたらすか。海の上を吹いて來た、清潔なオゾンに富んだ空氣ではない。青葉若葉を吹いて來た酸素に富んだ清涼な空氣ではない。春夏秋冬の四季を問はず、常に黄塵萬丈の汚濁な空氣である。その中に混じて居るものは、馬糞もあらう、肺病患者の痰もあらう。考へればゴツト身ぶるひが出るのである。第一番都會に萬人が萬人とも必要の食物とする空氣が汚れて居るのである。その汚れた空氣をば、子供は生れ落ちた時から呼吸して居るのである、どうしてもかやうに汚れた空氣はよい影響を子供の健康に與へぬのである。次には日の照らし方が違ふ。一體太陽の

方は廣大無邊で、あつて上下貴賤の區別を御立てになることはない。八方世界を遍照したまふけれども、砲兵工廠の煙突や、上野新橋の汽車の煙や、各種製造所の煙突の煙は、始終空氣を汚しつゝ、あつて居る。それに前にいつたやうに黄塵は立ち舞つて居る。かやうに汚濁な空氣の中を通過して來る太陽の、光線だもの、どうしても山なり海なり平原なり空氣の清潔な所にさして來る光線とはちがふ。太陽の光線も赤健康とは大關係のあるもの、その光線がかやうな譯であるから、都會はどうしても子供の健康に善からう筈がない。田舎ならばどんな小さな家でも、庭もあれば敷もある、樹木もあれば草花もあつて、たとひ百姓家の、室内は不潔勝であらうとも、屋外一步を踏み出せば、小供に取つては良好なる遊歩場、適當なる運動場がある。村の鎮守は彼等の公園で、廣々とした野や山や原や、は彼等の植物園で、そこには動物も種々あるから又動物園を兼ねたものである。子供は是等の處を己が天地として、自由に勝手に活動するからして、子供の身體はほとんどん發達するし、子供の

健康はほとんど増進するのである。然るに東京のやうな大都會に於ては、貴族や富豪を除いて、其の他一般の人の家には、庭といふものが殆んど無い、よしや有つても唯ほんの名ばかりの物であつて、とても子供の運動場たる資格を持つて居らぬのである。屋外へ踏み出せば、そこには人力車が通へば、馬車も通ふ。牛車も荷馬車も、轟々たる電車も、右往左往目もまよばかりに往來して居て、一寸注意を怠れば、忽ち生命に危害を及ぼすといふ危険が伴ふからして、到底子供の遊び場所には適當しない。若し遊んで居れば巡査はどしどしと叱言をいつて追つ拂つて仕舞ふ。さうかといふて、子供の遊ぶに適當な公園や、神社佛閣の境内や、植物園や動物園があつても、とても二百万の人口を有する大都會の子供を満足せしむるに足りない。それ故に子供は勢、家の中に引込むか、狭い庭で遊ぶか、或はびくびく道路で遊ばなければならぬ。それだからどうしても子供の身體の發達が十分でない、健康も亦十分でないのである。都會は子供をして自然に接せしめない。子供の

健康の上から見た都會は甚だ面白くない、前述の通りであるが、智力發達の上から見た都會も亦甚だ面白くない。田舎に生長する所の子は、幼少の時分から、日本人の常食とする所の米、重要な農産物たる米に就て、ゆるりと觀察する事が出来るのである。即ち苗代田に種子を蒔き下された事、だんだん生長したる後、苗取をやつて、いはゆる田植といふををするを、なほ生長して夏もすまれば穂を出し、花を開き、二百十日、二百二十日も無事に濟めば、まづ今年の收穫は確であると安心する内に、何處の田も黄なる浪を漲らし、彼處の家にても此處の家にも稻蒨を始める。更に刈りたる稻を千齒にしこき、日にかわかし之を唐臼にて挽き、唐箕や千石通しにかけて、いはゆる玄米にして俵にする、その一部始終を觀察する事が出来る。そして稻が種から米の飯となつて吾々の口に入るまでのを正當に理解し、已が智識とする事が出来るのである。右は一の例を上げたに過ぎないが、麥にせよ、大豆にせよ、蠶にせよ、其の他の植物にせよ、皆かういふ風に抑の始めより、

いよいよ終りまで觀察して、皆己が智識とするのである、然るに都會に於てはなかなかこれが出來ない。目に入るものは青き麥ではない、黄なる稻ではない、耳に入るものは頬白の聲でもない、ほととぎすの音でもない。自轉車である、人力車である、馬車である、電車である、自動車である。それではなければ餘所の家の屋根である。刺激が甚だ多いのである、又甚だ強いのである。けれども一物を始めから終りまで觀察するものが出來ぬのである。それ故に其の觀察はどうしても上つ面だけで、且薄つべらである。一鉢子供はまだ頭腦があまり發達して居らぬから、刺激はあまり強くない方がよい、その數も多くない方がよい、それから徐々と來る方がよい。そして簡單な方がよい。田舎は丁度之である。田舎はかういふ點からも子供に適して居る。然るにかういふ點から見ると都會は一つも合格しない。刺激が甚だ強すぎる。甚だ數が多い、そして急激に來る、しかも複雑である。子供の發達しない頭には、とても刺激に應じきれぬのである、とても負擔に堪へきれぬのである。

それ故に或る者は機敏のやうにはあるが、一物の關する智識がまとまらない。極めて淺薄な智識を得るのである。そして自然に關する正當な智識が得られない。かういふ點から見ると、都會は子供をして自然に接せしめないというて宜しい、隨うて初步の教育地として不適當であると斷言して差支なからう。

都會は便利過ぎて却つて子供に惡影響を與へる田舎では隣村へ行くにも、町に出づるにも、人力車もなければ、況して馬車も電車もない。それ故に自己の足をたより、自己の力を頼まねばならぬ。然るに都會には電車もある、人力車もある、一寸出かけるにも是等外物の力を借りて、自己の力に依頼せぬのである。田舎ではか金を使はうにも、子供の目を刺激するやうな玩弄物店だの、菓子屋などが遠くにある。都會になると、それはそれは一步踏み出せば、皆子供の慾望を刺激するやうな物ばかりである。此の點からいつても都會は子供の教育上餘り好まし所といふとは出來ぬ。

都會は子供を育つるに都合がよくない。以上わ

げ來つた所によると、都會は子供の健康に宜しくない、都會は子供をして自然に接せしめない、都會は便利過ぎて却つて悪影響を與へる。それ故に都會は子供を育つるに都合がよいかといふ問に對しても、然り都合が宜しいと答へるとは出來ない。否寧ろ都會は子供を育つるに都合がわるいと答へざるを得ない。(をはり)

國學院大學にては校舍本館の新築落成したるを機とし左記諸大家に委嘱して來る八月一日より夏期講習を開設する由、聽講料は貳圓五拾錢なりとぞ

◎講習科目及講師

國文學の特質及其の變遷の大綱 文學博士 芳賀矢一君
(十二時間)

國文研究に必要な歴史事項 文學博士 萩野由之君
(二十四時間)

作詩法附支那戯曲小説の大要 森 槐 南君
(十二時間)

漢字漢文に關する史的觀察の一斑 岡田正之君
(二十四時間)

科 外

日本語源論沿革 文學博士 上田萬年君
文學史料としての古文書 文學博士 三上參次君
支那文學談 文學博士 市村瑞次郎君

余がノート

大元 茂一郎

はしがき

ヨハン、ハインリッヒ、ベスタロツチは、溢るる許りの熱誠を以て、幾多の困苦失敗に屈せず、貧兒教育に力をつくしたといふことは、教育史の吾人に教へて居る所であるが一千年後の今日、ベスタロツチだけの赤誠を以て兒童教育に従事せるもの果して幾人かある。明治のベスタロツチは健任なりや。兒童教育は面白いもの殊に幼兒に於て然りである其思想をたゞげば天真爛漫哲人も及ばぬ奇想も出てくる。余はその奇想を知ることゝたのじみにしてゐる。これからかれ等の思想界が如何に愛らしいか、ノート中より少しづつ抽出して見たいと思ふ。

一 小學校の方が面白い
「幼稚園より小學校の方が面白いや」……と突然いひ出したのは落着いた身体の發育のよい男の兒である。「ネー忠〇さん小學校の方が面白さチ」……

そこで余は何故にと質問したら、その答に曰く、「小學校の方がめづらしいのです」

二 わの通りです。

スズメのスの字を授け、あとで此字は何といふ字です。一しよによんでごらん……ス……よくよめました。どのやうにかくのでした。誰れかいへますか……木〇さん……(木〇手眞似を以て示す)……余曰くよしその通りです。〇さんは……と問ふと、〇屹立して曰く。「その通りです」余その通りつて……と攻むれば、〇も剛のもの直に黒板のスの字を指し「わの通りです」余は遂にまけてしまつた。

三 先生駄目ですよ。

運動場の看護は頗る面白い。先頃もか手玉臺の所へ出ていつたら兒童の大歓迎をうけた。余が御承知の夏向のヒゲを下から上に片手でなでて居るのを彼等の中の一人が見て、「先生駄目ですよ」何故にといつたら、みんなが口をそろへて「先生の

四 これ位です

ヒトガキマスの文を授け、讀本をひらかしめたる時挿畫を見せしめ、ヒトはどれです、そのヒトはどれ位の人だと思ひますかと問ふた。余は「私位のことでもです」との答を豫期してゐた。所が意外、榎〇元氣よく机側に出でて讀本の挿畫位の大さを手にて示し、而して曰く、「先生これ位です」

五 私は夏がすき。

余の控室に頗るブーアであるが、一つ愉快なことがある。それは、歸る時に尋一生が「先生さよなら」といひに來ることである。その時に色々面白いはなしをきくことがある。此間も勝〇が西〇にひいてハツさん一年でいつがすきか？わたしも夏がすきなといつたので、余傍より何故夏がすきな？あつくつて花などもないのに……といふと、勝〇答へて曰く、

「夏は氷あつきがたべられるから」

西〇がまた、氷あつきあいしくつてよ先生!!私すきな……

六 提灯は何にするもの？

圖書の時間であつた。提灯をかゝせるので、最初

提灯の構造を問答し進んで提灯は何にするものですかと問ふたら、車夫の子供先生「と手をあげた。そのいふ所をきけば曰く。

「夜お父さんが車につけます」

七 御免遊べ。

かや武〇さんつてひどいよ、人の足をふんで……と上級の女の子が尋二の武〇にいふと、武〇例の可愛げな顔を少し赤くし態度を改めて、わびて曰く、

「御免遊べ」

それで上級のとがめて居た女の子も破顔一笑!!これから御免遊べの語が流行しました。

八 それでもこわいのです。

今でも随分家庭では、子女を躰けて行く方便として虚偽を用ひ恐怖せしむることをやつて居るのか皆さんはどうなるのがこわいのですかと書いて見ると、蛇、蛙、大風、雷、盗人、犬、獅子といふやうな實際彼等が経験したものを以て答へるものもあるが、中には、ゆゑれいと、か、人さらへとか、彼等が未だ経験しないものを以て答へるものがあ

る。東京市では人さらへをこの威嚇の材料としてゐるのか、これを以て答とするものが多くあつた。人さらへつて何?とさくと、「知りません」知らないのにこわいつておかししいじやありませんかといふと……「それでもこわいのです」

参考までに兒童のこわいとしてあげたものを示せば左の如くである。

人さらへ、ゆゑれい、おばけ、どろぼり、おに、蛇、かみなり、こじき、狐、猪、象、地震、火事、かへる牛、犬、しし、大風、猫、

九 大福とおさつ

ある時、皆さん何がすきか?一番すきなものをいつて御覽といふと、思ひくくに容赦なくいつた。人形、太鼓、刀(おもちゃの)、じよーきせん(おもちゃの)らつばふーせん、はな、鯉のぼり、お手玉……と随分多く出て。その中で一つ面白いといふよりは、むしろ可憐にさかれたのは貧しいうちの女の兒「先生!!大福とおさつ」といふ答であつた

一〇 また一つ二つと數へます。

尋一学生十三名に入學の初期の算術の時間に彼等が數へ能ふだけ數へさせて見て。

十迄のもの……………一人
 十以上二十以下のもの……………二人
 二十以上三十以下のもの……………四人
 三十以上四十以下のもの……………一人
 四十以上五十以下のもの……………一人
 五十以上九十以下のもの……………二人
 百迄のもの……………二人

その百まで數へたものにこれから如何に數へるか
 とさいて見たら、一人は百一二と數へますとい
 つたが、一人は、また一二と數へますといつた。

人生の七時期

樂 天 子



凡べて世界は舞臺にて、あらゆる男女は俳優なり、
 彼等は皆其の出口及び入口を有せり、一個の男子
 はその時に從ひて其の役を演ず、其の幕七段あり、
 第一段に於ては乳母の腕に泣き絶がり、或は乳を
 吐きもどす嬰兒となり、次には輝ける朝の顔色に
 小革提を持ちて、蛇の如く好もしげもなくうねり
 行く口さわがしき學校の生徒となり、其の次には
 情婦の眉根に溝えたる怜れなる歌曲を以て爐火の
 ごとく焦思せる情郎となり、次でわやしき誓ひを
 喜び豹のごとき鬚を善ひ功名を貪りて之に熱し、
 忽ち怒り忽ち争ひ、炮口に臨むとも尙ほ且つ水泡
 のごとき譽れを求むる兵士となり、更に續きては、
 良き俚諺を多く辨へ、處世の方法と交際の道とを

心得、切り付けの髻を捻りて正道を行なひ得々としてその興へられたる任務を果す、第六時期に至りては、鎗頭として滑稽演技者の如く鼻端に眼鏡をかけ小脇に財囊を携へ、能く保存せられたる壯時の袴は、今や瘦脛に廣過ぎたる廣き世界となり、男らしき襟は變じて子供の高調子に返り、話響の間に吹鳴す此の面白き人の歴史を終はる最後の役割は第二の子供時代にして、齒なく、目なく、味なく、各々の物なき單一なるものとなるなり。

世はをしなべて
あらくゆる人は
往くもかへるも
みなそれ／＼に
な、つのやくを
うばのかひな
あさなく／＼に
をしへの庭の
はなぞ穗に出て
わぎものかどへ
ひらめきわたる

舞臺なり、
役者なり
とゝまるも
ところえて
つとめゆく
なけるちぢ
うねりゆく
てならひ子
戀のみち
こがれゆく
つるぎをも

踏みくだかんと
誓ふなる
年のなべ
世のよしをしを
たちつぬつ
かいの身に
見るからくしき
うらさびて
ほをりゆく
もとのちのみに
もののおやめも
わかす消え行く
是れ人生の七時期と題せる彼の有名なる「シエ!
クスビヤ」の詩篇なり、全篇を通じて、熟讀玩
味すれば首尾相照應じて、昆々たる興味の湧出す
るものあるを見るべし。

むくつけき
やがてたけゆく
ゆたかさよ
くみわけて
ゆきたけるむ
くつろぎて
風情なり
しのび／＼に
身の終り
かへりきて
ぬばたまの
わかれゆく

田吾作生活

朝露生

春とは云へどこの夕風の執ねくも寒きことかな。かさらば桑港灣よと吾等五人はつぶやきて船室の戸を鎖した。けたいましき汽笛の音と共に、船はゆらゆらと動きいだした。船内には早くも電燈が點ぜられてゐる。浪はや、荒くなりゆきて、船尾の水車は、無愛喬にも吾等の胸にまで余響を與へる。室にみてる安値煙草の悪臭と共に、吾等の身もゆらゆらと、まことにイヤな心持である。一行相顧みて苦笑した。船室には違ひないが上等客むきの船房を借れ切つたわけではない。食堂の片すみ、カーテン一つに余地を區畫して、二列の共同椅子が并んでゐる。吾等放浪黨はその片はしを占領してゐるのだ。相似たる境遇の碧眼赭髯共、背中合せに腰かけて、且語り且煙を吹くに忙はし。吾等を挟さみて、ヤンキーの泥酔漢も居る。古色蒼然たる豚尾先生も居る。かくてもこの席は船底の混在に比して紳士的なのである。この余地を得

んとして、船底からノコノ鼻つてき、失望してかへるもの幾人あるかしれぬ。舷頭に立ちて、暮色をながめるわけにゆかぬは、この名譽ある地位を失ひたくないからで、東部に於ける經濟界の恐慌と例の有難き排斥熱のため、吾等は職を失ふて學を廢して仕舞つたのである。思へば金をつくりつゝ、學問の蠶食を試みんとは、チト蟲がよすぎる話であつた。ことしは田園の人となつて、筋骨を鍛練しやうと同志仲を結びて桑港を去つたのである。船はいつの間にかサンバプロ灣を過ぎ、サン灣に入つて居る。夜はや、更けて、異人種のいびき音、交々聞ゆる頃、吾等は夜氣に睡魔を打たせて舷頭に立つてゐる。星光燦として寒く遠岸の燈影浪の上に輝き、船は誇り顔に暗を衝いてサクレメント河を遡つてゆく。吾等もしばしばどろむほどに、午前二時コントラコスタ郡のジョーセー島に船をよせた。吾等はこの島にてお百姓の第一歩を學ぶつもりである。船は吾等と多少の荷物とを波止場に残し、いそいそとまた河を遡つてゆく。知らぬ土地の深夜、道たどるべき術もなくて、

ほど近き建物の椽の下にひそみ、二三の毛布に足をつゝみて、五人一團となつた。寒氣は荒々しくも夢をゆすりさまして、曉の待ち遠しさ、心々に愚痴をこぼしてゐるかしらねど、何れも強さうな顔をして瘦我慢に力んでゐる。議論を好むこと、率直にして舌鋒鋭きとによりて鐵兵衛てふ名の錚々たる男、コンマ以下の趣味に精通してゐながらクレオボトラの名を知らざりしとの理由によりて美人の名そのまゝ尊稱に代へられてゐる男この二人は一行中の花役者である。吾は弱蟲と自稱して豫じめ嘲笑の機先を制し、他の二人にそれ相應の雅號を捧呈して置く。一人は農學生なるが故吾黨中にては母家の太郎左衛門、一人は獨逸文學を嚙り居るせい、イヤに七くどく理窟を捏ねるところから理窟屋とたいへ奉る。氣焔は霜となつて帽子の上に花を飾つてゐるほどだから、何れも沈黙して身をふるはして居るばかりである。やがて夜が明けはなれたので、道を求めて耕地の方に進んだ。一本柳のかげに殘燈まだ赤きところあれこそ目ざすキャンプであらふと勇氣加はりて

やゝ身のうち暖かになつたが、行李やら臥具やらが厄介にて兩腕の筋が切れはせずやと危ぶまるゝ。先づ歎聲を發したのには「弱蟲」であつた。二哩に足らぬ道ながら、吾には十里の旅のやうに思はれた。柳の木かげからネグロ顔の日本人はゴロゴロと出てきた。何れも一騎當千の田吾作ばかり、面皮の黒さは勳功の多さに比例してゐるのだから、吾輩の先輩として何れも様へ敬意を表した。仲には吾等の友人も居つた。この人の紹介にて吾等も彌々田吾作の連判帳に記入せらるゝとなつた。時、是、〇八年三月三日、母國にてはお雛壇に桃の枝を供へて白酒を汲んで居る頃であらふなど、慣れぬキャンプ生活に引きくらべて、内心甚だ平かでなかつた。この日一日は我等の仕事を休み、臥床を作ることゝした。柳を中央にして、二軒のキャンプがある。東なるは粗末ながら住家らしきしつらひありて、臥床もそれ設けられてゐる。總勢三十八人とのことにて、とてもこの一家にのみ住みきれずクレオボトラ君だけ仲間入りした。吾等は他の一軒に住むことゝなつたがそこ

は庖厨と食堂とコソクのルームとの外物置部屋のあるばかり、吾等はその中に新たに寢臺を築くわけだ。すでに建設を終へて布團をならべてゐる一組もある。例の波止場近くの納屋にゆきて古板片を肩にし鐵兵衛先づ勇氣凛々として歸つてきた。つづいて吾等も片息になつて無事到着、鋸と槌とを動かして苦闘二時間余り、納屋の片すみ二つの寢臺が据えつけられた。窓に近き方には理窟屋と羽蟲と鎮坐します。間に机代りの板を隔て、鐵兵衛と太郎左衛門と枕をならぶ定め、覺束な板たいみの上に、麥藁をしきつめ、その上に布團を安排して設備是に全たした。芋袋に麥藁をつめて枕とし、蜘蛛の巢の壁に釘うちつけて帽子をそこにかくるのである。

この夜は薄き布團の寒くて眠られず外套を重ねなとして轉寢した。ありのすざびにづらかり市中の働口など思ひいだし、彈條臥床など今更戀しく思ふものもあるであらふ、六時に起床の鐘が鳴つた。鐘と云へば鹿つめらしいが破損した農具の一部か、菱形の環をなせる鐵片を窓外にかけ、これ

を叩くのである。ジャンジャン／＼となる頃は吾等何れも起きてゐたのだ。化粧石鹼香水も香油もこの天地には用がないのである。カラヤカフスや扇にいたりて無用の閑具、ネキタイやピンや冬の扇、抛擲して可なりだ。首に巻くハンケチの流石に白絹なるは見つともなし。こゝにてはやはりメキシカンのやうな更紗のハンケチを巻く方よかつたのだ。古服に破帽子、身を堅めて立つて見れば何れも堂々たるお百姓様だ。東家の面々も起きてくる。堤の下の河にゆきて口漱ぐもある。井戸のはとりにて黒い顔を洗ふてゐるものもある。吾先にと食堂につめかくる。河より獲たる鯉の味噌汁鄙びてゐるが風情ある。何れも健啖豚の如し見るから勇ましい。七時に鐘がなつて働さにいづる定め、一同は番號をもつて居るので、仕事は戸外に張りだされてゐる。余は三百八十一號であつた。吾等の一行は甘藍植と云ふ役を仰せつけられた。東導せるは古參の黒顔髻のある次位頭取である。三町ばかり野良にいで、霜白き苗島について。こゝにて苗を採るのであるが、日未だ暖かならず朝

風身を斬る上に、霜のため指先が落ちさうである
 一時間ばかりにして苗を畝地にはこび植ゆること
 した。例の大陸的な畔なしの一枚島、三四列
 植ゆるに半日を消し去つた。午後は空曇り風寒く
 加ふるに雨の御見舞弱蟲まづ休戦を主張したが、
 鐵兵衛頑として肯んぜず、しばらくして雨やみ正
 六時と云ふに一同切りあぐることとなつた。飢え
 たる腹を抱へて走るさま中々觀ものである。その
 わくる日は洋芹の種蒔の準備として苗床をつくる
 仕事であつて、熊手を使用するのだが、熊手の中々
 吾云ふことをきかぬ。平板、鏡のやうに地をなら
 すこと中々むつかしい。石ころや土塊などは地の
 底に埋めるのであるが、時には地の底も石ころや
 土塊のみのところもあつて、途方にくるゝことも
 ある。この島はサクラメント河とサンオーキン河
 とによりてつくられし三稜州である。見たところ
 周圍十里位であるが中に五千エーカーの耕地があ
 ると云へば面積或は今少し多いかもしれぬ。耕地
 は重に洋芹をつくるのであつて、毎年種代のみ二
 千五百弗あまり拂ふときく。甘藍や馬鈴薯、松實

菜などはほんの島内の需用に過ぎぬであらふ。幹
 部は會社組織となつて、幾多のキャンブにはそれ
 それ頭取があり、かくて秩然たる仕事の進行を見
 るのである。吾等のキャンブは二十六號であつて
 ボスは町田と云ふ人である。やさしい親切な人で、
 昔ゆかしき學生さんの潜んでゐるのであらふと噂
 とりどりである。さう云へば獨逸語などもいくら
 か解して居るらしい。三百余人の勞働者のうち二
 百人は日本人である。吾等のキャンブにては四百
 エーカーの耕地が受持であつて、重に苗床の仕事
 である。水を引くために溝渠を掘ることや、苗床
 の間に溝をつくることや、種を蒔きての仕事、草
 をけづる仕事、かくて數月のうち苗をぬきとりて
 他のキャンブにわたしやるのださうである。他の
 方面にては、去年植えしセロリーを今盛んに切り
 だして居るところもある。筍菜を切りだして居る
 ところもある。白人勞働者は馬を使用して最初の
 耕耘をやるもの、水揚器械室に働くもの、波歩場
 に働くものなどである。日本人の日給は一弗四十
 仙であるが、夏季には一弗七十五仙位、まで昇る

ことがあるとのこと、食費は一日廿仙位、ボスに拂ふべきコンミツションは五仙づゝであるから、一日一弗位の貯蓄はできるわけだ。一年働けば三百餘弗、十年には三千弗、百年には三万弗よなどゝくだらぬことを云ひ合ひて大笑することもある。

東家にも書生さんはまじりて居るらしいが半數は純然たる御百姓のみである。布哇を卒業してきたのもあれば、フレスノサンノゼなどを轉戦してきた勇士もある。例の零點下の趣味にて、塔博の話にあらざれば酒色の談のみ、甚だ恐入るが中には無垢な真情の残つてゐるのもあり談じて衷心の機微に觸れて見れば、何れもうるはしき人ばかりである。働さながら聲朗かに俗調の數へうたを歌ふものがある。所謂農園思想を露出したまゝで、彫琢をからぬ自然の言葉であるが、中には人情の琴線にターチした音色もある。一つ紹介して見やうか。

六ツトセー無理な仕事は身の毒と

女房の手紙を見るごとに

心うれしく無理をする

中々しほらしむことを云ふてゐるではないか。毛唐に叱られることや、言葉わからずに不自由することや、中々寫實に読み込んでゐる。最後に理想として横濱へ歸舟をつけし時の服装を書いてある二重マントロ金時計だとサ、その無邪氣サ加減まことに愛すべきものだ。文藝俱樂部の口繪をわた壁に貼りつけて、千朶萬朶の花見をしてゐるのもこの連中である。書生黨の中には、俳人も居る。新体詩人も居る。されど何れも讀書の元氣を銷沈さして仕舞つたらしい。新書の五人黨のみは、金文字の二三冊を後生大事に枕頭にかざり、毎日寸蔭を惜みては研鑽をすゝめて居る。クレオパトラ先生は、獨逸のラプストラーを拾ひよみしてゐる。理窟屋はシェリ、キーツ、バリンヌなどの詩集を愛讀し傍ら弱蟲と共謀して、獨逸小説の翻譯をやつてゐる。鐵兵衛も名にし負はずやさしい男であつて、パイロンを繙いてゐる。太郎左衛門は専門の農業書でも纏んでゐることかとのぞき見るにこれも小説らしき横文字をたどつてゐる。その勇

氣いつまでつゞくことぞ。續かなくつてサとは吾等と伊人仲間との押問答であつた。慣れぬ仕事の弱き身にすらく、働きはじめのおくる日は雨に遇ふて半日休み、月の中ごろまた風はげしければとて休んだことがある。名詮自稱の弱蟲、恥かしくないこともないが、日にさらされし面皮の厚くなりゆきて、平氣で白晝惰眠を食ふこともある。閑くところによればこゝの仕事の如きは、農園の初段ださうで、これだに出来ぬやうには逆もあ百姓たることむつかしいと吾と吾身をはげましてまた働きにゆくこともある。アメリカのありがたさには何日休まうと何日働かうと自分の勝手次第であるが。さりとてわがまゝな日暮しも出来まじとその后休まぬやうに心がけた。

日曜には一同仕事を休むのである。洗濯をするものもある。小宴を開くものもある。下等なるクラレットに酔ひて怪癖を振ふものもある。吾クレストラ先生もその馳走にあつかりて酔歩蹒跚、はからずも理窟屋に衝突し、御説諭を忝んじたこともある。ある日曜であつた。伊人新体詩人並に吾

等四人、花見にゆくことゝした。クレストラ先生は梢頭の花よりは解語の花の面影をながめんとてか、秘藏の寫眞を守りてひとり残ると云ふ。理窟屋に嚴命せられて、さらば船頭となりて一と役かけつとめんと、棹をとつて小舟に立つた。河を超えてゆくこと三哩、オークレーと云ふ村がある。村にのびて數十エーカーの果樹園、アーモンズの花今まさかりである。園に對して廣き芝生あり田舎の年若き男女入り亂れてベースボールを遊んでゐる。そを見るものゝ笑ひさゝめく中に、風さつとふきて落花は雪のやうにふりかゝる。わが國の梅の花のやうな清香は望まれぬことながら、千樹萬樹に紅雲棚びき、見る目飽かぬ心地する。小草花さく野邊の錦に身を横へて、日傾くころまでものがたりした。田舎寺の夕べの鐘に促がされて歸途についた。御寺に詣づる啼女たちの鄙びたれど流石に衣裳うるはしく、日曜らしき想する。葦間に舟をつけて、吾クレストラ先生は迎へに來てくれてあつた。勞働中は午前と午後二回、出次や勤惰などを調べに來るものがある。年若き白人

であるが、その面貌「胃活」の廣告に似たりとて何れも彼のことを胃活々々と呼んでゐる。このもの一言にて免職となることもあるのだから、何れも胃活を憚りて、彼の姿の近くに見ゆるうちには、何れも勤めぶりを見せて居る。勞働道德とか何とかやかましく云へば云はるゝが、一日十時間とはたらく身になりては、多少の蔭陽なくては体がつかぬのだ。新体詩人の一人は「胃活來る」と云ふ長篇を書きて一同の喝采を得たこともある。稱善の主任はボンベイと云ふ大男である。その名實の相似たる所から、衆悉く彼を權兵衛さんと呼んでゐる。社長夫婦は馬車を驅りて見廻ることもある。かゝる次第故、毎日英語をはなす機会は絶無と云ふてよい。かの胃活に番號を尋ねられてそれより答へること出來ず恭しく札を示して事をすます人もある。コックは中年の日本婦人である。夫は同じく野良に働いてゐる。布哇よりの轉航者ださうで、味噌汁の中に乾鰯と素麵とを放して喰はせたり、コックせぬ甘藍に醬油をかけてだしたりする。中々奇抜なる料理をする女だ。布哇にて

孤女一人拾ひあげて育てたさうで、可愛らしき小娘がある。名も異國ぶりに近くオリカと云ふのだ。十二位だらうと思ふが、からだの發達に比して教育の開發をうけてゐない。この頃は島にある小學校に通ふて居るのであるが、家庭はこのキャンブであるから受くる感化はブラズ的とは云へない。多くはマイナス的である。憐れむべきものだ。残月と柳の葉かげにかけて、清新の曉色を慾まにながむることや、夕星を浪にもませて、船を暮靄の中に放つなど、詩趣多き朝夕のたのしからぬわけもないが、圖書館なく公園なし書店なし教會なき鳥流しの境涯、ましてや學校を退きてかゝる生活に早變りせる身の、悔やしからぬことあらふか。半夜人静まりて燈火ばかり吾等の友、この恨忘るべからず、とて各學課にいそしむこともある。せめてはこの島にて持ち來りし書だけも研究し了らんと相勵ましてゐたのに、こゝも有爲轉變の風吹きわれ、居ること二十五日にしてこの島を去ることとなつた。

五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	一、二	一、二	一、二	一、七	一、七	五	五	六	六	六	
四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、	四〇、
一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、	一一、
一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、	一四、
一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、	一三、

武	關	桑	頌	多	小	笹	關	近	酒	平	小	澤	淺	田	小	十	川	橫	堤	小	伊	武	福	小	一	中	柳	服	西
田	谷	田	幼	榮	林	野	根	藤	井	具	坂	田	田	坂	管	文	島	田	山	藤	石	田	岸	色	村	井	部	村	
ま	い	ま	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	
つ	ま	龍	園	う	う	美	つ	し	冬	助	貞	う	る	つ	と	と	つ	い	つ	わ	ね	重	い	う	え	ち	る	き	

一、	二、	六	六	六	五	一、	二、	一、	一、	一、	一、	二、	一、	一、	一、	一、	二、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	二、	一、	二、	一、	五
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四

近	田	大	岡	妹	吉	佐	小	坂	中	青	水	古	津	安	谷	今	矢	稻	持	鈴	大	海	下	吉	高	安	落	樹	池	
藤	邊	塚	田	田	田	木	林	田	島	島	橋	橋	山	東	東	井	田	田	田	木	内	老	田	村	瀨	藤	合	心	邊	
し	幼	定	み	た	芳	か	か	幾	哲	水	平	平	山	東	東	井	田	田	田	木	内	老	田	村	瀨	藤	合	心	邊	
げ	稚	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園	園

二	三	六	三	三	三	三	三	三	三	六	三	三	三	三	三	三	三	三	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

攝山町波鳥武武尾神金加暈小後小佐佐伊小石岩岩今大野高岩岡勝桐
井口田居居嶋田田田子畿見池閑出方泊藤關小谷川本本立野岡岡山山田島
西則み三三茂げい順きつさみ菊末外のすかねね太郎吉裕奈端つ吉み子



一	二	一	一	九	五	二	六	六	五	五	五	五	六	三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	七	三	一	一	八	五	九	九	三	三	三	三	三	六	三	三	三	七	九	三	三	三	三	二	三	三	三	三

小原鈴佐白大白大佐關岩井樺長小間伊千東野京千斯伊林黒藤中吉富岡
松木藤井井原藤崎川殿崎野人吹賀崎口野波藤田岡村田岡田
壽徵ニ濱ミユセま千むひた稚崎幼雅ふた美千し秀さ治弘定とこま龜起
保信キ子ハキキナ枝まさめ園さね志枝な子了子安一蝶治きうる門作

一、二、五〇	一、二、六〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、七〇	一、二、七〇	一、二、〇〇	一、二、〇〇	一、二、八〇	一、二、六〇	一、二、四〇	一、二、四〇	一、二、四〇	一、二、六〇	一、二、〇〇	一、二、三〇	一、二、〇〇	一、二、五〇	一、二、四〇	一、二、六〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、〇〇	一、二、〇〇	一、二、〇〇	一、二、六〇	一、二、二〇	一、二、二〇		
四一、二、一	四一、二、一	四一、三、一	四一、三、一	四一、三、一	四一、三、一	四一、五、一	四一、五、一	四一、〇、一	四一、〇、一	四一、一、一	四一、一、一	四一、二、一	四一、二、一	四一、二、一	四一、二、一	四一、七、一	四一、一、一	四一、一、一	四一、一、一	四一、一、一	四一、二、一	四一、二、一	四一、三、一	四一、三、一	四一、三、一	四一、三、一	四一、二、一	四一、四、一	四一、四、一	四一、四、一	四一、三、一	四一、二、一	四一、二、一
四二、一、五	四二、一、七	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	四二、二、一	

廣島

田口	久米	石井	寺野	上野	駒形	石田	平田	東邊	田邊	村田	橋本	土保	福尾	山口	小原	須藤	高原	森内	中内	齋藤	香川	市村	山崎	横田	磯田	司畑	小島		
た	テ	か	隆	賀	久	ゆ	とも	も	律	タ	タ	か	き	き	ち	つ	直	乙	次	み	ます	芳	徳	世	い	信	太	郎	
い	ル	つ	造	久	長	き	み	と	道	ね	ル	ん	く	よ	え	ね	吉	女	郎	つ	園	み	代	衛	信	太	郎	信	郎

一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	一、二、二〇	
四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三	四一、一、三
四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一	四二、一、一

四十三

園田	磯和	遠藤	坂元	小河	高橋	平山	中島	秋山	猪狩	松浦	丸山	近藤	山形	小笠原	杉本	井上	飯沼	大沼	加藤	金藤	佐藤	柴田	毛利	白石	清家	岡崎
き	と	長	美	あ	は	ひ	き	つ	み	志	か	は	ぬ	茂	ま	し	千	代	常	良	め	子	恵	初	元	元
よ	江	め	喜	い	ま	さ	え	ね	い	那	く	ま	で	穂	き	静	づ	代	常	良	め	子	恵	初	元	元

一、一〇〇	一、二〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、〇〇〇	一、四〇〇	一、六〇〇	一、七〇〇	一、九〇〇	一、〇〇〇	一、二〇〇	二、〇〇〇	一、二〇〇	二、六〇〇	二、一〇〇	二、〇〇〇	一、三〇〇	三、九〇〇	〇、二〇〇	一、二〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	六、〇〇〇	一、二〇〇	六、〇〇〇	
四〇、一一四	四一、一一四	四一、一一四	四一、一一四	四〇、一一四	四一、一六	四一、一五	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六	四一、一六
九	八	三	三	八	六	四	五	四	八	三	八	三	六	九	八	三	一	三	三	三	三	三	三	六	二	八	

渡邊	保科	藤村	藤並	野澤	久米	美濃部	吉益	伊藤	木村	青森	佐久間	坂元	島村	永井	中島	中島	馬場	橋本	小幡	福本	中田	樋口	下村	堀越	吉川	市原	中島	廣田	梅澤	
幸修	子京	いみ	あ	た	た	東	洞	長	い	孝	ね	や	そ	ん	し	き	庸	な	さ	き	い	く	吉	三	次	み	み	化	三	代



三〇〇	一、六〇〇	一、五〇〇	九〇〇	二、五八〇
四一、四	四〇、四	四一、六	四〇、三	四〇、八
四一、六	四一、三	四二、九	四一、五	四一、一

尾寺	首里	金子	波邊	上野	古市	臨屋
し	區	まつ	あ	あ	な	な
げ	所	え	梅	い	幸	は

月刊 産科婦雑誌

購読希望者は日本産科婦協會員となり一ケ年分會費前金壹圓を納入せらるゝ時は毎月配本すべし

本誌創刊以來茲に九年時勢の趨向に鑑み一大刷新を加へて世に見えんとす産科婦雑誌中實際問題に對し指導者たり顧問たり得るもの本誌を措きて他に求むへからず二段組十八行の植字は自ら内容の豊富を語り時論、原著及實驗、家庭衛生の諸欄盡く讀むべし殊に時論及講義に至ては窃に本誌の特色として江湖に誇る所敢て大方の一讀を待つ

(講義)は正科として産科婦學(産婆學)及び看護學を連載し遠隔の地に在る人尙高等産科婦養成所の講筵に參するの思ひあらしむることに試験準備の諸姉に對しては無二の良師友と謂ふも強ち誇大に非ざるべしと信ず

明治四十一年六月

東京市日本橋區濱町三丁目七番地
産科婦人科補田病院内

發行所 日本産科婦協會

〔電話浪花一六〇番〕

フレイベル會發行

幼稚園遊戯

定價金四十錢
會員特價三十錢
郵税四錢

幼稚園の爲めに編纂され幼稚園の爲めに出版されたものは本書が始めてであります。世の幼稚園に關係せらるゝ方々は是非一本を座右に備へられんことを望みます。尚本書には女子高等師範學校内にて作られた幼児用唱歌の歌曲並に同校附屬幼稚園に於て現今採用せらるゝ保育要項とを附録として採録致しました。

フレイベル會發行

幼児談話材料

定價金四十錢
會員特價三十錢
郵税四錢

世に行はれて居る多くのお伽話は幼児教育に不適當なものであります。本書の内容は特に幼児の爲めに作られたもので幼稚園時代の幼児に最も適當なるものを集めてあります。家庭間の贈物などには最も妙なるのみならず、苟も幼児教育に關係して居らるゝ方は是を標準として作話せられんことを希望致します。

日本造花研究會著

新造花獨けいこ

插畫三百餘頗美本机上の飾となる
定價 金五拾五錢
郵替貯金 金
振替貯金 六
口座番號 六
最新刊 三版二ヶ月 六
にて賣盡し 四版 五

特女中が校閱無學の女中に本書を讀んで聞か材料は少し材料は求め易く造り易い新工夫がしてありますから費用極少し
色標本を分與全く初心者には造り上げた花と道具は不用最初は道具一組三十五錢で揃ふ定價表書中により實際親切な本
三百餘の畫を以て平易に親切に説明し尙實物標本さへ分與す如何なる初心者でもはつきり分り容易に熟達す

大好評を得、訂正増補第四版發賣

大景品づき

▲一等は金拾圓の材料と道具
▲總金高 壹千二百〇四圓

空籤一本もなし

▲景品券は各書籍中にあり
△景品は直に郵送す

東京市牛込區
納戸町六番地

明治の家庭社